

パリ市街の街路樹の立ち並ぶ、大きな通りに面しており、通りに平行してガラスの壁を立ち並べることで、鮮烈な都市の光景を生み出していました。しかし、歩道のぎりぎりまで突き出されているガラスのスクリーンは圧迫感はなく、むしろニュートラルに周りの建物と調和しているように感じました。

ガラスの壁は透過率が調整されており、樹木や人の動きや、周囲をダイレクトに知覚させながらも、映り込んだ虚像がオーヴァーラップさせられ、自然と建築が融合したかのような錯覚に陥ります。そのため天候の状態、見る位置、見る角度によって、変化し、流動する境界面が生じ、敷地内の樹木や空をファサードに映り込ませるスクリーンとしても機能しており、建築そのものの存在感をさらに希薄にしていました。

あいにく見学に行った時は中に入ることはできなかったのですが、樹木が歩道まで突き出し自然との距離感やスケール感のとり方が不思議としっくり感じました。アラブ世界研究所と同じ設計者であり、双方共に外部環境との関係性を大事に取り組んでいる点が共通しているように思います。パリの建物の秩序組みの中に際立つ建物は異質のようで、パリの空気の中に溶け込んでいるその様は優美な造形を軽やかに演出しているようでした。

